

社会を 明るくする運動

東温市大会開催

社会を明るくする運動東温市大会が7月24日に中央公民館で行われ、中学生2人が意見発表しました。この運動は、すべての国民が犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、力を合わせて犯罪のない地域社会を築こうとする全国的な運動で、2019年で69回目を迎えます。

地域の力が犯罪を防ぐ

テレビや新聞では、毎日のように犯罪のニュースが報道されています。安全で安心な暮らしはすべての人の望みです。犯罪や非行をなくすためには、どうすればよいのでしょうか。取締りを強化して、罪を犯した人を処罰することも必要なことです。しかし、立ち直ろうと決意した人を社会で受け入れていくことや、犯罪や非行をする人を生

み出さない家庭や地域づくりをすることも、とても大切なことなのです。立ち直りを支える家庭や地域をつくる。そのためには一部の人たちだけでなく、地域のすべての人たちがそれぞれの立場で関わっていく必要があります。

できることから始めよう

社会を明るくする運動では、街頭広報、ポスターの掲出に加えて誰でも参加できるさまざまな催しを行っています。イベントに参加したり、広報を見たことなどをきっかけにして、犯罪や非行のない安全で安心な暮らしをかなえるために、今、何が求められているのか、そして、自分には何ができるのかを、みなさんで考えてみませんか。

下段で、当日行われた中学生の意見発表をお伝えします。



モノクロのフィルター

重信中学校2年 田房 聖菜さん

も、私の学校に転入生があることを知ったら、私はどうするだろうか。正直に言うとうるさくするだろうと思わないようにするだろうと思いました。非行少年だったのなら、再び問題を起こすかもしれない、そんなことには巻き込まれたくない、そう思い、もしかしらなければいい態度をとるかもしれないと思いましたが、一方で、その子のことをよく知らないままに、自分とは違う、悪い人なのだと決めつけるような行動をとることは、よいことではないと思います。そんなことをする自分にはなりたくないという気持ちもあります。そもそも、生まれたときからの悪人などいないはずなのに、なぜ、非行に走ったり犯罪に手を染めたりする人が出るのでしょうか。

心を開ける仲間存在

私は、安心して過ごせる場所を作ることだと考えました。同じ学校の仲間として、悩みを抱えていたり困っている様子があつたりしたら、声を掛けるべきだと思います。職場などでも同様です。身近な場所、心を開ける仲間がいると、孤独感が減り、非行を減らすことができるのではないのでしょうか。また、非行を繰り返す生活から抜け出そうと思ったときにも、元の生活に戻ることが簡単になるのではないのでしょうか。

私は、非行や犯罪に走る要因の一つに、「孤独感」というものがあると考えます。家庭環境の不安定さ、学校や職場における人間関係の悩みやトラブルなど、孤独を感じる原因はさまざまに想像できます。家や学校などで安心して過ごすことができないのは、とても辛いことです。その辛さから逃げようと、居場所を求めて非行グループに入ったり、悪いことをわざとやってストレスを発散したりしているのかもしれない。彼らが非行や犯罪に向かわないようにするために、私たちができることは何でしょうか。

モノクロのフィルター

私たちの心にある先入観は、その人を否定し、本当の姿を見えにくくしてしまっています。いわば偏見というモノクロのフィルターを心にかけているのです。このフィルターをかけることは、非行や犯罪歴のある人の「更生しよう」という意思をつぶしてしまうことにつながります。モノクロのフィルターは、非行や犯罪歴のある人たちだけでなく、障がいがある人、LGBTなどの



性的マイノリティに対しては、偏見というモノクロのフィルターを取り払った先にあるカラフルな社会の創造を、私は目指していきたいと思っています。偏見というモノクロのフィルターを取り払った先にあるカラフルな社会の創造を、私は目指していきたいと思っています。偏見というモノクロのフィルターを取り払った先にあるカラフルな社会の創造を、私は目指していきたいと思っています。偏見というモノクロのフィルターを取り払った先にあるカラフルな社会の創造を、私は目指していきたいと思っています。

どうして私はみんなのようにはできないんだろう。こんな気持ちになったことはありませんか。私にはありません。私は吹奏楽部でフルートを担当しています。フルートを始めたのは中学生になってからです。同じ学年のみんなと練習をしているときに、みんなができることが私だけできない。全く成長しない。そんな時がありました。顧問の先生の、「成長する時期は人それぞれ違う」という言葉が、耳に入りませんでした。思うようにできないことが悔しくて、悔しくて。自分で自分のことが嫌になりました。ふだんの私は、友達や家族からたくさん愛情をもらっています。友達や家族から「すごいね」と言ってもらったことがあるおかげで、自己肯定感が高いほうだと思っています。しかし、その反面、嫌なこ

ポジティブチャレンジ

それは、一日一つ、自分の良いところを見つけてほめる。名づけて「ポジティブチャレンジ」です。一日の生活の中で、自分の良いところを一つ見つけるだけです。どんな小さなことでも、良いと思えることができた自分をほめて、認めるのです。簡単にできることから始めることにしました。例えば、「友達の落とした物を拾って渡せた」「すれ違った先生や先輩に挨拶ができた」などです。では、どのくらい効果があつたのか。「ポジティブチャレンジ」を始めてからの私は、「これができなくても、別にできることがあるんだから落ちついてやっつけていこう」と考えられるようになりました。ポジティブチャレンジを続けて半年ぐら経ったとき、前向きに考えられるようになっていました。

手をさしのべる優しさ

昨年の豪雨災害のとき、愛媛県には甚大な被害がありました。被災した地域の復興にたくさんの方がボランティアで参加していました。私はニュースを見て、困っているときに、手をさしのべる人がたくさんいることを改めて知りました。私たちの学校では、アルミ缶回収運動を行い、地域の福祉施設に椅子を寄贈する活動を続けています。川内郵便局に回収用のドラム缶を設置

して、毎日、朝と夕方、生徒が回収に行っています。平成十四年から始めて、これまでに二十二台の椅子を贈呈することができました。川内中学校のほとんどの生徒が回収運動に参加しています。伝統あるボランティア活動に参加し、少しでも誰かの役に立てることが嬉しくなります。手をさしのべる優しさは、自分に返ってくるのかもしれない。

今、社会ではいろいろな犯罪が起きています。犯罪の中には、自分自身や周りから認められないことが原因で起きているものがあると思います。私はそんな人に、ポジティブチャレンジを広げたいのです。ポジティブチャレンジを通して自分自身を、お互いを認め合うことが社会を明るくすることにつながるのではないのでしょうか。

ポジティブチャレンジ、最初の一步は一人ひとりが自分の心を明るくすることから。



ポジティブチャレンジ

川内中学校2年 柴 千琳さん

「ポジティブチャレンジ」を始めてからの私は、「これができなくても、別にできることがあるんだから落ちついてやっつけていこう」と考えられるようになりました。ポジティブチャレンジを続けて半年ぐら経ったとき、前向きに考えられるようになっていました。



参加者は、中学生の発表を真剣な表情で聞き入りました